

わが狼

寝転がっている。ただ寝転がっている。なんの不足もない。しかしただ寝転がっているこいつはなんだ。何のためにアル。食物連鎖の一環？　なにかの餌？　餌だとしたらなにもしくなくてもいい。牙を立てた口が近づいて大きく開くのを待っている。待っている？　ただ待っているのも退屈だ。一日は長い。来もしないものをただ待つなど冗談じゃない。いわんや食われるのを待っているなんてとんでもない。馬鹿もの噴飯ものだ。待つてなどいいない。ただ寝転がっているだけ。なんの不足もない。過去も未来も知らない。ならば何のためにアルか。またしてもこの問い。この問いこそセーシンとやらの核である。「である」と断言してやる。しかしそんなことはどうでもいい。私はただの餌である。いや餌ではない転がる木偶である。そんな問いはくしゃくしゃに丸めて屑籠に放り込んで知らんぷりだ。ただ寝転がるとはそういうことである。

（ワレ革命ス、ユエニ世界アリ）

しかし本当に世界はアルのか。寝転がっていると窓の端から青空がちらりと見えたりときおり天の欠伸のように風が吹き込んだりどこぞの叢の虫の音や上の階の幼児の木琴を叩く音が聞こえたりするのだがこれをもって世界といえるのだろうか。アメリカほか二百余国が集まったものが世界なら私は世界を知らない。幾億の恒星と幾億の惑星衛星がしかるべき法則にしたがって離合集散している暗黒が世界だとしたら私は世界を知らない。いままさに窓の外で二匹の紋白蝶の追いつ追われつしているこの小さな瞬間が世界だとしたら私は世界を知らない。それでもなにかを知っているとしてこの小指の先ほどの知はどこへつながる。かくも無為に寝転がっていてなにができるというのだ。

（ワレ革命ス、ユエニ世界アリ）

いやはや。なにをひっくり返すというのか。選挙の一票はやくたいもない茶番を囃したてる拍手一億分の一であるにすぎず玄関を出る一步はそれを一億倍してもこの狭苦しい地表から踏み出る決定的な一步にはなりえず一円を一億ケケル一万貯めれば一兆円になるというのは小学一年生の算数に過ぎない。歴史は変わる。歴史は変えられるが変わった歴史は更に変わり更に更に変わる。変わることはなんでもない。不変はどこにあるのか。ここに寝転がって動かないこの私が変わるか。いや動く。手が動く足が動く。刻々と姿勢を変える。始まりも終りもないこの動きに一体なんの意味があるのか。私の一生をどう左右するのか。二匹の蝶の鬼ごっこが無垢のかけがえのない一瞬ならば畳の上のこの怠惰な午睡もかけがえのない一瞬である。この一瞬を幸福とおうか。たしかに。自由に団扇をばたばたやれる幸福はまことにありがたいものである。しかしここにこうやって寝転がっているということこれが存在の究極のあり方だと決まったものでもない。二匹の蝶はそばで遊んでくれるかもしれない。空が光り風が吹き込みときに美しい想念が湧いてくるかもしれない。ここにも世界はあるだろう。しかしそれを両手でつかんではない。永遠はここにはない。ながめているばかり。ただ寝転がっているばかり。

（ワレ革命ス、ユエニ世界アリ）

部屋は乱雑を極めている。いや極めてはいない。これはまだ序の口だともいうかのようにどこまでも乱雑の度は増してゆくらしい。散らかるのは本であり本でありまたしても本である。本の上に本が重なり立ち並ぶ本の奥に本が立ち並ぶ。どれだけ読んだのか。半分は読んだとしておこう。本のボタ山の半分を読んだ私がここに寝転がっている。私の頭脳の記憶にこれらの本は蔵われているか。さて。私の内部には本は並んでいないようである。茫洋とし暗澹とした沼のようなものがあるばかりである。この沼にかつて本から採取した観念や情念が溶け込み隠れているやらないやら。本を読んだことも忘れて新しい一冊を読もうとも思わずに寝転がっている。寝転がって光をながめている。本は無意味だったか。四半世紀の読書はどこへも道をひらかなかったか。二十五年前のある日と同じく私は寝転がっている。二十五年を隠した沼はふてくされて押し黙っている。どれあの本この本を思い出そう。思い出せない。思い出したところかどうかということもない。本は乱雑を極めながらピクリとも動かない。乱雑の真中で寝転がっている。言葉を失い言葉を求めて寝転がっている。

（ワレ革命ス、ユエニ世界アリ）

夕暮れが近づく。外では子供がけたたましく泣いている。なにが悲しくて泣くのか。私は悲しくないそのことが私を寂しくさせる。あのラッパを吹き破るような轟々たる泣き声とおの昔になくした。そのとおの昔から今までの歳月はどこへ行ってそしてこうして無為に寝転がっているのか。私はどこにいるのか。蝶。宙に遊ぶ二匹の蝶。天地という眩暈の中でさらに眩暈を求めて旋回する蝶の運動感覚。その運動が生み出す世界旋律。世界と遊ぶ浮遊と回転。てんちてんちてんちてんちてんちてん。相手と入れ替わりあの世と入れ替わる彼我の転生。相手を追い宙を歪め自分を壊し舞い戯れる蝶。寝転がって夢に蝶を呼ぶ。

（ワレ革命ス、ユエニ世界アリ）

人は欲望によって動く。欲望がぶつかり合うところ、戦争だ。戦争？　食うか食われるか？　真つ平御免だ。だからこうして寝転がっている。なにもせず安逸に寝転がっているこの瞬間欲望はない。自分がアルということに茫然自失している。ぼんやりの中で呟いてみる。これでいいのか。蝶が見える。蝶が呼ぶ。欲望とともに立つ自分が見える。立とう、と呟いてみる。その欲望に導かれ戦争する破目になるとしても？　沼に手を突っ込んで欲望とやらを取り出してみるか。

（ワレ革命ス、ユエニ世界アリ）

あいつに会いたい。これが私の欲望である。この部屋を出よう。ちょっと歩こう。あいつに会いに行こう。しかしどこにいる？　わからない。たぶんどこかにいるはずだ。この天地のどこかに。部屋を出て百メートル歩いて偶然ばったり出会ったら？　あいつだとわかるだろうか。あやしい。どんな顔をしているか。どんな立ち姿か。はつきりと思ひ描けるか。できない。どうして。会いたいのだろう。あいつはどの本の中にもいない。見定めなければあいつは現れない。あいつはいないのか。いないはずがない。いる。いなければならぬ。思い出してみろ。私は熱にうなされる。一回転し二回転し畳の縁から沼の中へ転げ落ちる。

（ワレ革命ス、ユエニ世界アリ）

寝転がったまま夜になる。部屋を出ようと思ひながら立ち上がらずでに外は暗い。もう動けない。私の沼と外の闇がひとつつながり私はとらわれる。私はいなくなる。眠り。夜は強い。私の目の光は弱り眠りに吸い込まれる。「また明日だ」そう呟く。何度そう呟いたことだろう。何度を数えようとして目が眩む。うとうととする。今日くらい「また明日だ」でなくてもいいではないか。沼がささやく。沼がゆれる。沼が発火する。暗い欲望に手を引かれ立ち上がり部屋を出てゆく。夜の風が吹く。百メートル行ったところであいつに出会う。あいつは私を見逃さない。飛びかかってくる。こちらら貴様の餌ではない。狼よ、胡蝶の舞を教えろ。そうだ。狼と私。月のかけらもない暗がりの中で。けだものの仮面をかぶり互いに目を光らせて。てんちてんちてん踊り狂う。ちてんてんてん踊り狂う。

わが骨を口にくわえ真夜の彼方へ歩み去る狼こそ**世界**である。